

<講演抄録>3.冠,橋義歯学におけるシミュレーション教育について(東日本学園大学歯学会第6回学術大会(昭和62年度総会))

著者名(日)	日景 盛
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	7
号	1
ページ	40
発行年	1988-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007346/

2. シミュレーション教育について

田中 収（補綴Ⅰ）

第1補綴学講座では、全部床義歯の製作の一連のステップをPCT-Systemを用いて実習させ、基礎実習では行えない印象採得などの術式と材料・器材の取り扱いを理解させている。そのため、マネキンの頭顔面部にはカンペル平面など全部床義歯製作上の基準を表示し、咬合器部は生体に近似した下顎運動を再現でき、ゴシックアーチやパントグラフなどの下顎運動測定が行えるように改良した。また、新たにシリコンラバー製の擬似粘膜

を有する無歯顎模型を開発した。

実習内容は2人一組となり、診査（無歯顎の解剖学的特徴の把握）、予備印象（既製トレーとアルジネート印象材）、最終印象（個人トレー、トレーコンパウンドとチオコールラバー印象材）、咬合採得、ゴシックアーチ描記、蠟義歯試適、装着・咬合調整を行わせる。実習期間は6週間で、本実習の後、患者実習を指導者のもとで行うことになる。

3. 冠、橋義歯学におけるシミュレーション教育について

日景 盛（補綴Ⅱ）

患者診療を実際に行う前に、開発されたマネキンを利用したシミュレーション実習を、臨床実習期間に次の3点に留意しながら進めている。

(1)水平診療における術者の姿勢と患者の位置：最も楽に精密な作業を長時間続けるための基本姿勢を覚えてもらう。

(2)水平位での支台歯形成：支台歯形成時のハンドピースの持ち方と固定のし方、動かし方を学んでもらう。

(3)支台歯形成：これは歯科医自身が必ずやらねばなら

ない操作であり、かつその優劣は最終的にできあがる補綴物に直接大きな影響を与える。そこで切削器具の選択や能率のよい切削順序を習得してもらう。

また支台歯形成から補綴物装着にいたるまで実際の患者診療と同様な操作をしてもらう。このシミュレーション実習により実際の診療にスムーズに移行できるように顎模型や人工歯等のマネキンの改良を進める予定でいる。

4. シミュレーション教育について

山下徹郎（口腔外科Ⅰ）

口腔外科におけるシミュレーション教育の主目的は、現在のところまず抜歯手技の修得においております。使用する模型はC₃、C₄を中心とした歯牙で構成されており、それらの歯牙はエレベーターや抜歯鉗子による抜歯が可能で、接着剤を使用する事により数回の使用ができます。粘膜は局所麻酔が可能です。

模型を装着したマネキンを歯科用ユニットに固定し、

実際の患者さんと同様に消毒、局麻、抜歯と云う様に進めております。まだまだ種々の問題点がありますが、これを臨床実習に導入する事により患者さんの抜歯を行う前段階として非常に教育的な効果をもたらせると思います。今後は埋伏歯の抜歯、歯根端切除、膿瘍切開、歯槽骨整形、嚢胞摘出などを行なえる模型を考案し開発中であります。